

キリスト教受容における情趣の働き

美意識からのアプローチ

檜内 久義

愛知みずほ大学瑞穂高等学校

日本におけるキリスト教受容の形態を日本人の宗教観および美意識を中心とした情趣的傾向に焦点を当てて考察していく。具体的には、民族宗教としてのキリスト教と日本語に見られる日本人の美意識を手がかりとして、日本文化においてキリスト教がいかなる存在であるか、その一側面について考える。

はじめに

日本文化としてのキリスト教をテーマに考察を重ねてきている。

キリスト教に限らず、信仰は最終的に個人の問題であり、その「うち」にある信仰対象の様相を「そのままのかたち」で具体的に把握することは不可能である。しかし、その「個人」が属している（自らのアイデンティティとして積極的に自覚しているか否かを問わない）文化（「個人」の人格が形成される過程と、その後においても「個人」をとりまく風土的・習俗的な主な生活環境というべきもの）に影響を受けており、個人を超えた広がり（たとえば、宗教的もしくはその他の価値観に基づき「個人」として積極的に選択して属するグループやコミュニティを除く、地域、民族等の、生活を「共有」するゲマインシャフト的な生活文化圏）、特定の宗教における信仰形態には、共通の特徴が見られる。その特徴こそが、他の特徴を生み出さなかった、その文化内に暮らす人々の価値観を表す（明確にする）ものである。

それは、いわゆる「伝統文化」について考えてみれば、理解が容易であろう。「伝統文化」（もしくは「伝統文化」と呼ばれる文化事象）が、伝承しなければならないという特別な意図により強制的に守らねばならぬものを除けば（言語の分野においては、一部の方言などに見られる）、「伝統」を有するとして現在においても「生き続けて」いるのであれば、その文化が有する価値は、時代を超えて、同じ文化内に暮らす人々にとって好ましく、その対象に関す

る価値観は共通ないしは似通ったものであることを意味する。

宗教に関しても同様であり、特定の宗教に対する人々の反応は、それを信仰する人々の「個人」を超えた「背景色」（価値観を生み出す環境）を示し、その文化内での宗教に関する価値がいかなるものであるかを把握する手段となり得る。キリスト教であれば、それは、日本国内の特定の一部の地域という限定された範囲を超えた「日本」というスケールで、その受容形態を知る術となり得るのである（ただし、歴史的背景を主な理由として明らかに地域差はあるが）。

本章の冒頭で「日本文化としてのキリスト教」という表現を用いたが、その研究対象は、あくまでも文化であり、宗教（信仰）そのものに限らない。その意味で、本稿で考察する対象は「日本人にとってのキリスト教」とでも換言できるものである。すなわち、日本という文化圏内で、キリスト教が、人々の間において、どのような印象をもって受容されているのか（または拒絶されているのか）を中心に考察することとなる。本稿では、キリスト教に対する印象を生み出す源となる日本人の情趣に焦点を当てながら、かつまた、キリスト教のいかなる性質が、その情趣を刺激するのかに注目する。

民俗宗教としてのキリスト教

まずは、日本におけるキリスト教の最大の特徴といえる性質について確認しておきたい。その特徴とは日本におけるキリスト教は「民俗宗教」であると

いうものである。

「民俗宗教」とは、「普遍宗教」または「創唱宗教」と呼ばれ、世界中に信者を有する宗教に対し、特定の民族や文化圏（国家もしくは地域）においてのみ信者が存在し、基本的に他民族や他の文化圏への布教を目的としないローカルな宗教を指す。

その特性を宮家準の定義を用いて紹介すると、概ね以下のようなものである。

年中行事、通過儀礼、俗信などを中心としたこうした宗教を、私は民俗宗教と名付けている。生活上の必要から、自然発生的に成立した民俗宗教は、教祖をもたぬわけであるから教説はない。むしろ儀礼が中心で、伝説や神話がそれを説明する形態をとっている。その社会基盤は、家、親族、地域社会、民族などの既存の社会組織である。それ故、普遍宗教のように第三者にその教えを広めることは必要とはされていない。しかし、その儀礼、伝説、神話などを自分たちの子や孫に伝えることが強く求められている。¹⁾

周知のとおりキリスト教は世界において多くの信者を有し、「普遍宗教」の代表格とされる存在である。また、キリスト教には『聖書』という「教説」が存在し、さらには「教祖」に相当するイエス・キリストも存在する。その点からいえば、キリスト教を「民俗宗教」として扱うことに違和感が生じることであろう。

しかし、「日本文化としてのキリスト教」の特徴を考えると、この「民俗宗教」の特徴が顕著に見られる。

宮家が民俗宗教の特徴として挙げた点でいうと、以下のものが、その特徴として挙げられる。

- ①年中行事、通過儀礼を中心としている
- ②社会基盤が家、親族、地域社会、民族などの既存の社会組織である
- ③第三者に教えを広めることは必要とはされない

2008年に全国16歳以上の国民1,800人を対象に実施されたISSP国際比較調査²⁾(宗教)での「宗教的な行動」についての回答で「よくする」、「したこ

とがある」行動の上位二つが「墓参り」（「よくする」66%・「したことがある」29% 計95%）と「初もうで」（「よくする」55%・「したことがある」37% 計92%）であった。その二つの「よくする」と「したことがある」を合計した割合は、ともに90%を超える極めて高いものであった。

この結果は、宮家が指摘する①の特徴を顕著に物語っている。また、同機関の同調査(宗教)での「目には見えないが、宗教上は存在すると考えられているもの」(以下、「宗教的なもの」と表記)についての回答で「絶対にある」と「たぶんあると思う」と答えた割合で最も高かった項目が「祖先の霊的な力」（「絶対にある」・「たぶんあると思う」計47%）であった。

この結果は、「宗教的な行動」の項目で最も高い割合を示した「墓参り」を行う動機と考えられるものであり、日本人の宗教観において注目すべき特徴と考えられる。

また、この「宗教的なもの」の調査結果は、宮家の指摘する民俗宗教の特徴の②に当てはまる。ちなみに、同機関実施同調査の「あなた自身は、何か宗教を信仰していますか」の項目で「宗教を信仰している」と答えた人の割合は全体の39%であり(内訳は仏教が34%・神道が3%・キリスト教が1%・その他の宗教が1%)、その割合は高くない。

その点を鑑みると、「宗教的な行動」と「宗教的なもの」での最も上位を占めた「墓参り」、「初もうで」、「祖先の霊的な力」が、何らかの宗教を信仰していると答えた人以外の人々にとっても、行動として示したり、存在として認めたりというように、日本人の特徴的宗教観を示すものと考えられる。

その意味でいえば、この調査結果は、宮家が日本人の宗教は民俗宗教であるという説を裏づけるものといえる。

次に、日本におけるキリスト教において見られる民族的宗教的な特徴について指摘する。

日本のキリスト教史において、その特殊な歴史的事情(伝来時からの受け容れ、弾圧など)を背景として極めて特殊な信仰形態を有し、本来のキリスト教とは全く異質の宗教として挙げられるものに「カクレキリシタン」がある。

その信仰形態および宗教観は宮崎賢太郎が、『カクレキリシタンの信仰世界』(東京大学出版会1984年)で、その宗教観を詳しく紹介しているが、宮崎は同書で、「カクレキリシタン」の信仰を「現代のカクレは、歴史的にはフランシスコ・ザビエルによって日本に伝えられたローマ・カトリック」に由来するものであることは明らかであり、二五〇年あまり

¹⁾ 宮家準『生活の中の宗教』日本放送出版協会1980年7頁

²⁾ International Social Survey Programme

にわたり江戸幕府の弾圧をこうむり、また明治以降一〇〇年以上の時を経て、カトリック的特質を消失し、きわめて日本的な民族宗教のひとつに変容していることは言を俟たない(同書30頁)と述べ、「日本的な民族宗教のひとつ」として見るべきと提唱している³⁾。

同書で宮崎が挙げる「カクレキリシタン」の信仰形態の要点を整理すると概ね次のようなものである。

- (a) 自分たち以外への布教は目的とはしていない
- (b) 原動力は祖先とのつながりを断つてはならないという祖先崇拜である
- (c) 特別な教説も教祖も持たない
- (d) 基盤は、家、親族、地域社会である
- (e) 儀礼中心である

同書で宮崎は、「カクレキリシタン」は、自分たち以外への布教を目的とはせず、自分たちの子孫に、その教えを伝えることだけを求めている。そして、その原動力となるものは、祖先とのつながりを断つてはならないという祖先崇拜であると指摘する。また、加えて、特別な教説も教祖も持たず、その代わりに伝説的殉教者らを聖人扱いし、その伝説などを語り継いできたと述べ、その基盤は、家、親族、地域社会というグマインシャブト的世界であり、祖先が命をかけて守り通してきた儀礼を忠実に継承することを最大の目的としていたと指摘している。

この特徴は、先に紹介した宮家の「民俗宗教」の特徴とまさに合致するものである。

紙面の都合で本稿では、日本文化におけるキリスト教の民俗宗教的な特徴として、宮家の民俗宗教の定義に見られる①と宮崎が「カクレキリシタン」の信仰形態で民族宗教として挙げる(e)に関してだけ採り上げるが、それこそが日本文化におけるキリスト教の民俗宗教的性質を最も顕著に表していると思われるとともに最も理解しやすい性質と考えるからである。

①(e)の例として誰しもがすぐに思い浮かべられる例として、キリスト教を起源とする行事であるクリスマスとキリスト教式結婚式がある。たしかに仏教や神道を起源とする、もしくは、起源とすると思われる行事として、年中行事であれば、彼岸に行

われる墓参り、「盆」の行事、初詣、通過儀礼であれば、七五三などがあるが、それらは少なくとも祖霊崇拜や祈願成就などの信仰に基づく意図を有している点でキリスト教のそれと異なる。

もちろん、加藤周一らが指摘してきたように仏教も外来の文化であり⁴⁾、日本人は、それを自分たち独自の「日本仏教」として変容させた、また、石田一良が指摘するように神道においても、外来のイデオロギーを「着せ替え」のようにまもってきたというように⁵⁾、日本においては、仏教や神道も不変、絶対的な宗教とは捉え難く、その行事における信仰心の有無や度合いを問題視することも可能だが、クリスマスやキリスト教式結婚式ほどのファッション化とも呼べるような度合いの形骸化は見られない。もちろん、受洗を済ませている信者、または「求道者」と呼ばれ、キリスト教信者となることを目指している人々においては、クリスマスもキリスト教式結婚式もファッション(形骸)ではないであろう。しかし、それら二つの行事は、信者もしくは求道者以外の一般的日本人にとっても、ごく当たり前の年中行事または、通過儀礼として受容されているのである。その点で仏教や神道に起因するものとして行われる行事とは異なる。換言すれば、クリスマスとキリスト教式結婚式というキリスト教起源の二つの行事は、キリスト教を信仰していない人々の生活の中に自然に溶け込み、さらには積極的に選択、関与されるものとなっているのである。極論すれば、日本人全体で考えるとき、クリスマスとキリスト教式結婚式は、消費される商品のような対象であると言える。その比喩があながち間違っただけのものではないことは、二つの行事をめぐる経済効果の面を考えてみれば納得できるのではないだろうか。その形骸化の度合いの大きさは、キリスト教信者が積極的に彼岸に墓参りをし、盆の期間に仏壇に供え物をし、先祖の霊を火を焚いて迎え、送り火でもって送り出し、神社に初詣に出かけ、子どもの成長を祝うために祈祷を授かることをしないことを鑑みれば明らかである(もつとも、キリスト教の教会が日本の伝統文化を尊重する意味で仏教や神道に起因する行事を「形骸的」に取り入れている例も少なくはないが)。すなわち、極論すれば、キリスト教は、行事や儀礼を中心とするのではなく、行事や儀礼以外には、その「姿」が見られない存在であるとも考えられる。その意味で、信者や求道者以外の日本人にとってのキリスト

³⁾ 宮崎は後に前掲書における「カクレキリシタン」のキリスト教(カトリック)から民俗宗教への変容という自らの見解に反省を加えた論文を発表している(『日本人のキリスト教受容とその理解』国際日本文化研究センター『日文研叢書17』1998年)。

⁴⁾ 加藤周一『雑種文化』講談社文庫1974年

⁵⁾ 石田一良編『神道思想集』(筑摩書房『日本の思想14』1970年)

教は、ファッションであり、「上着」的な「はおりもの」に過ぎないのである。信仰という「核」を失ったキリスト教は、外出から戻れば上着を脱ぎ去るように、その目的が終われば必要性を失う、形骸化した存在なのだ。

社会との乖離

前章では、普遍宗教であるとされるキリスト教が日本においては、その文化の影響を受け、民族宗教として変容していることを述べたが、ここでは日本におけるキリスト教の姿を、「教え」をめぐる教会の在り方と日本社会との乖離に対する批判によって確かめる。日本におけるキリスト教が、いかに本来の（または本来のものとしてされる）キリスト教と異なる姿をしているかを考察することが本稿の目的の一つであるが、それを考えるにあたり、キリスト教の教えと日本社会との隔たりを把握しておくことが有意義と考えるからである。

まずは、「空洞」というイメージから、その乖離を生み出す要因としてのキリスト教会に対する批判から見てみる。

佐久間勤編著『ネイティブ・インカルチュレーションの時代』中の一章としてカトリック教会の司教である中川明は「妖怪の棲む教会—NICE⁶⁾以降の教会とその将来」を記している。

その中で中川はカトリック教会の在り方を、福音によって全人類に希望と救いをもたらすと声高に叫び続けてはいるものの、実際の社会情勢に即した行動を起こしてはいないとし、その姿勢を批判するにあたり、作家の司馬遼太郎が週刊誌⁷⁾に語った次の言葉を引用している。

ローマの神学校では「神が存在する」という神学が千数百年行われ続けました。空洞の中に空洞の見えない筒があるとして、これに糸を巻く。論理で、修辞で、哲学で巻く。どんどん巻いて太くして、中にならぬとどうあるとはとても思えなくなるほど巻いたものが神、絶対だと思います。⁸⁾

司馬は「空洞」そのものではなく、その空洞があるとは思えないほど「論理」や「修辞」や「哲学」という糸を巻いたものが「神」だとしている。

すなわち、重層的に重なり合い絡み合っているものの、「神」は「論理」であり、「修辞」であり、「哲学」という、実体を有しない論理の世界、「頭の中」の世界であると捉えているのである。

実体を持たないということは、ここでは「神」の神秘性、絶対性を意味しない。あくまでも人間の営為である思考の産物であることを意味する。「神」が人間を含む全世界を創造したはずであるのに、そこでは「神」が後になり人間が先になるという転倒した世界が広がっている。もし、中川が指摘するとおり「神」が論理や哲学であるとすれば、それらを生み出した文化の価値観、世界観を「神」が超えられるだろうか。「頭の中」の世界が、思考の範疇に属するような対象が、果たして信仰という思考を超えた土壌において根を張ることができるだろうか。

日本の社会がキリスト教がどのような環境であるかを牧師であり、東京大学名誉教授、日本学士院会員でもあった隅谷美喜男が自著『日本の信徒の「神学」』の中で次のように述べている。

問題は日本の社会が、キリスト教的風俗とは全く無縁な、文字通り（世俗世界）であることである。先に、日本の信徒は青年期に洗礼を受けて信徒となるものが多数を占めると記したが、多くの場合、家庭にあっても唯一の信徒であり、家庭の中で信徒として振る舞うことは初めから困難である。学業を終えて社会に出れば、そこは一層非キリスト教的世界である。キリスト教の信徒であることを公然化することもしばしば困難である。ということは、職業社会、更に言えば一般社会の中で、キリスト教信仰を公然化し、企業や一般社会の慣行に異を唱えることは、極めて困難である。忠実な青年信徒の多くが、医師や学校教師、保健師等の道を選んだのは、そこに誘因があったと言ってよいであろう。

こうして日本のキリスト教会では、聖日に牧師が二階で準備した説教をし、信徒は一階で、中には週日に聖書を読み、学び、二階建ての途中まで上る準備をした信徒もいて、牧師の説教に心を澄ませて聞き、共に神・キリストの讃美の歌を歌う。そして礼拝が終われば、階段を下りて異教の社会に帰って行くのである。⁹⁾

以上の引用に見られるキリスト教もしくは信者

⁶⁾ 1987年に京都で開かれた第1回福音宣教推進全国会議

⁷⁾ 『週刊朝日』1996年9月6日

⁸⁾ 佐久間勤編『ネイティブ・インカルチュレーションの時代』サンパウロ2004年 85頁

⁹⁾ 隅谷美喜男『日本の信徒の「神学」』日本キリスト教団出版局2004年 217・218頁

(信徒)の扱いは、牧師の眼を通した姿であるとはいえ、ほぼ誰しもが首肯できる姿であろう。しかし、ここでは、その扱いではなく、その扱いを述べるにあたって使用されている「一階・二階」という表現、特に「二階」という言葉に注目する。そこに日本におけるキリスト教受容の形態が現れているからである。

隅谷はドイツの思想家で、長く東北大学で教えていたカール・レーヴィットが日本文化を批判した言葉¹⁰⁾ (『ヨーロッパのニヒリズム』筑摩書房 1974年)「二階建ての家」の「二階建て」という比喻を用いて日本の教会の姿を表現した。そこでの批判は先ほどの引用における対象である日本の社会ではなく、自らが属する教会に向けられているが、それは次のような考えである。

これはなかなか辛辣な批判であるが、日本の教会に姿に言い直せば、二階はカール・パルトやニーバー、トレルチ、更にはカルバンか女性解放の神学か、となる。勉強家の牧師であればあるほど、説教の準備にそうした著作を参考にし、頭に置いて、説教の核となる聖句の周辺を彩るのではないであろうか。それは立派なことである。だが問題は、それが、日常的な営為の中で、信徒が悩み苦しんでいる所とどうつながるかである。勢いの赴くところ、説教は二階で準備され、その準備によって説教が語られる。それを聞く信徒は、異教徒的あるいは無宗教的な思考と行動に毎日のように追い立てられ、主の御言葉を聞こうという願いを持って集まった信徒である。それはまさに二階建てであって、信徒は階段の途中まで上るのがせいっぱいである。誠実な牧師であればあるほど世俗から距離を置こうとする。信徒の方は与えられた任務に忠実であろうとすれば、牧師の説教との間に隔たりを覚えるのである。それが日本のキリスト教の二階建てである。¹¹⁾

以上の佐久間と隅谷が指摘した日本におけるキリスト教の在り方は、まさに日本社会と乖離したものであり、その教会(教義)と、人々(信者ですら)との間に少なくとも「階段」で「二階」まで上らなければならない隔たりが存在している事情を物語っている。

¹⁰⁾ 『ヨーロッパのニヒリズム』筑摩書房 1974年

¹¹⁾ 隅谷美喜男『日本の信徒の「神学」』日本キリスト教団出版局 2004年 216・217頁

日本人の美意識

日本人の情趣がキリスト教受容において、どのような働きを果たしているかについて、その美意識に焦点を当てて考える。その手法だが、「言葉」を手がかりとする。なぜなら、「言葉」は、それをを用いる文化圏の人々の考え方や感性を反映しているからである。

言語学者の大野晋は、自著『日本語の年輪』の「まえがき」にあたる章の中で、日本語と「ヨーロッパ語」を比較し、その双方に欠けている言葉について触れている。

もちろん、日本語の方がいつも言葉の数が多く、ヨーロッパ語の方がいつも少ないというのではない。ヨーロッパ語にあって、日本語に欠けている言葉もある。例えば、英語には、「自然」という言葉がある。ネイチュア nature がそれである。このネイチュアにあたる言葉は、日本語では「自然」という他、何も言いようがない。中国語やヨーロッパ語から借り入れたものではない、もともとの日本語をヤマト言葉と呼べば、ヤマト言葉に「自然」を求めても、それは見当たらない。何故、ヤマト言葉に「自然」が発見できないのか。

それは、古代の日本人が、「自然」を人間に対立する一つの物として、対象として捉えていなかったからであろうと思う。自分に対立する一つの物として、意識のうちに確立していなかった「自然」が、一つの名前を持たずに終わったのは当然ではなからうか。(中略)

「自然」が「人間」に対立する一つの物として捉えられなかったのは、日本民族においては、深い遠い由来を持つ事柄である。だから、「自然」という中国語を学んだ後でも、長い間、日本人は「自然」を一つの物と見る考え方を身につけずに来た。それは、単に遠い歴史の時代だけでなく、現代の日本人の間でも、根強いことのように見える。¹²⁾

引用文の最後で大野は、日本人の物の見方について、「それは、単に遠い歴史の時代だけでなく、現代の日本人の間でも、根強いことのように見える。」と述べているが、「自然」に関してではなくとも、最後の一文に書かれた内容は、他の事象についても当てはまることであろう。

¹²⁾ 大野晋『日本語の年輪』新潮文庫 2000年 12頁

美術史研究家の高階秀璽は、大野の『日本語の年輪』に述べられた日本人の美意識を表す言葉に対する見解を用いながら次のように述べている。

それでは、今日の「美しい」にあたる言葉、つまり「美」を意味する言葉は、昔は何であったかということ、大野によれば、それは「くはし」（奈良時代）、「きよし」（平安時代）であった。「きよし」は、現代でも「清い」というそのままの言葉が残っているように、本来は汚れない、くもりのないという意味である。奈良時代の「くはし」は、今日でも「香ぐわしい」という言葉に残っているが、後に「詳し」となることから明らかのように、こまかい、あるいは微細なという意味であったらしい。そのほか、今日きわめて広く用いられている「綺麗」という言葉は、室町時代頃から登場したが、これももともとは、汚れない、清潔な意味であったという。（中略）

言葉の歴史の分析から得られるこのような特色は、おそらく今日にいたるまで続いている日本人の美意識の特質を物語るものとしてきわめて興味深い。¹³⁾

この引用文の最後で高階も大野と同様に、「昔」の日本人の物の見方（ここでは「美意識」）が現代（「今日」）まで引き継がれていることが述べられている。「民俗宗教としてのキリスト教」の章で宮家が日本の宗教を民俗宗教と呼ぶ根拠として挙げたものの中の3点を紹介したが、その②は、宗教以外の範疇においても影響が大きいと考えられるので、その同じ社会基盤において用いられてきた言葉、そして、それを生み出した美意識をはじめとする物の見方は、親族、地域社会、民族と範囲を広げながら、時代を跨いで引き継がれていくことは何ら不思議なことではあるまい。

では、昔から現代にいたるまで引き継がれてきた美意識とはどのようなものか。引き続き大野の分析をもとに考えてみる。

「綺麗」は室町時代に、すでに「綺麗ずき」などと使われ、汚れないこと、清潔なことの意味をもっていたが、今日では「美しい」に近く使われ、やがて「美しい」を追い出して、そのあとに坐りそうな気配を示している。してみる

と、美を表わす言葉は、クハシ(細), キヨラ(清), ウツクシ(細小), キレイ(清潔), と入れ代って来たことになる。日本人の美の意識は、善なるもの、豊かなるものに対してよりも、清なるもの、潔なるもの、細かなものと同調する傾向が強いらしい。これは中国では「美」が「羊」の「大」なるもの、「麗」が大きな角を二本つけた立派な「鹿」の意味から転じたことを思うと、日本語の大きな特色といえると思う。¹⁴⁾

「美」を表す言葉に時代により意味の変遷が見られることを語りながらも、大野は日本人の美意識が「善なるもの、豊かなるものに対してよりも、清なるもの、潔なるもの、細かなものと同調する傾向が強いらしい」と述べている。また、大野は同書で、それら「清(潔)なる」ものや「細かな」もの以外の「美」として、「かすか」、「ほのか」、「わび」、「さび」などを挙げている。そして、それらを「かすか」と「ほのか」については、「『かすか』とは、今まさに消えていこうとするその薄さ、弱さ、頼りなさであり、『ほのか』とは、そのうしろに多くのものがありながら、その片はしだけが弱く、薄く、わずかに示されている場合にいう。」¹⁵⁾ (同書 34 頁) と述べ、「わび」と「さび」については、「『わび』とは、貧しさに徹して、それに耐え、世俗の騒ぎから離れた美である。『さび』が孤独に徹し、寂寥を美にまで高めようとするものであるのに対して、『わび』は、貧しさ、簡素さに徹した美しさを目指している。」¹⁶⁾ (同書 41 頁)

以上、大野が日本人の美意識の現われとして挙げた言葉の特徴を高階が大野の分析を紹介した箇所を含めて整理してみると以下のとおりとなる。

「くわし」 細かいもの
「きよし」 清いもの
「綺麗」 清潔なもの
「うつくし」 小さいもの
「かすか」 薄いもの・弱いもの・頼りないもの
「ほのか」 「うしろに多くのものがありながら片はしが」 弱いもの・薄いもの・わずかなもの
「わび」 貧しさ・孤独
「さび」 貧しさ・孤独 (に徹した) 寂寥

¹³⁾ 高階秀璽『日本美術を見る眼 東と西の出会い』岩波書店 1991 年 4 頁

¹⁴⁾ 大野晋『日本語の年輪』新潮文庫 2000 年 29 頁

¹⁵⁾ 前掲書 34 頁

¹⁶⁾ 同 41 頁

これらの特徴に共通する性質は、弱小であり、数量的に少ないというものである（「清いもの」、「清潔なもの」というのは、余分なものがない状態もしくは、ある程度の物質的な欠損を表すものであり、「少ない」という性質がもたらす美意識である）。

これら美意識を表す言葉に近いものとして「愛するもの」に対して用いられていた古語に「かなし」、「いとし」などの言葉があるが、これらも本来は「愛する」対象の自らの愛情の物足りなさ、もしくは、対象そのものの弱さなどに起因する感情であった。すなわち、日本人の美意識は、弱いもの、小さいもの、少ないもの（足りないもの）などの物理的、数量的に小さく少ないものにより呼び起される傾向が強いことがわかる。

キリスト教のイメージ

ここでは、前章で指摘した日本人の美意識と日本人のキリスト教に対するイメージとを対比させて日本人の美意識がキリスト教受容に関して、どのような影響をもたらしているかについて考える。

先に司教（神父）や牧師という司牧職によるキリスト教批判、いわば、「キリスト教側」からの日本におけるキリスト教の性質について考えたが、一般的な日本人のキリスト教観（キリスト教に対するイメージ）はどのようなものであるのか。

日本においてキリスト教を信仰しているとする人の割合は、先の ISSP の調査ではわずか 1%であった。また、自分の信仰の有無とは別に「親しみを感じる宗教」での割合は 13%であった。この「親しみ」に関する調査の回答で最も高い割合を示したのは、仏教で 65%、次いで神道が 21%の割合を占めた。その結果から日本人にとってキリスト教は信仰対象としても、また、一般的文化事象としても疎遠な存在であることがわかる。

その教え、その歴史など、さまざまな要素が相互に関わり合ってキリスト教を遠ざける環境を生み出しているのであろうが、日本人の情趣、特に先に見た美意識における感性が大きく関わっていると考えられる。

論者が実施したキリスト教に対するイメージに関するアンケート調査¹⁷⁾のうち、「距離感」と「大きさ」、「深さ」に関する調査結果は以下のとおりであった。

距離感

遠い：49%（「とても遠い」22%・「遠い」27%）
 どちらともいえない：32%
 近い：17%（「とても近い」5%・「近い」12%）
 その他：1%

大きさ

大きい：56%（「とても」29%・「かなり」27%）
 どちらともいえない：33%
 小さい：7%（「とても」2%・「かなり」5%）
 その他：3%

深さ

深い：57%（「とても」26%・「かなり」31%）
 どちらともいえない：33%
 浅い：7%（「とても」3%・「かなり」4%）
 その他：3%

「距離感」の調査結果は、ISSP の調査結果を裏づけ、キリスト教は日本人にとって疎遠なものであることを示しているが、そのような印象を日本人が抱く要因を考えるために「大きさ」と「深さ」に関する調査結果を手がかりにする。

「大きさ」に関する調査と「深さ」に関する調査の結果は極めて似通っている。両項目で、「大きい」、「深い」と答えた回答者の割合は 6 割近くで、数値としても 1%しか差がない（「大きい」56%・「深い」57%）。また、「小さい」、「浅い」と答えた回答者の割合は全く同じであった（双方とも 7%）。この二つの調査は、大きさと深さという、規模や存在感に関する印象を問うものであり、面積と容積の相違はあっても、キリスト教は日本人にとって「大きい」ものである印象を与える存在であることを示している。

キリスト教は日本人にとって大きな存在である。そして、疎遠な存在である。日本人にとっては、小さく、親しい存在ではない。

日本語が物語る日本人の美意識は、小さなものに対して心が惹かれ、それを好ましく美しいものと感じる感覚であった。その美意識がキリスト教を遠ざけているのではないか。

論者の同調査で「遠い」、「大きい」、「深い」と答えた回答者が挙げた理由はそれぞれ次のようなものであった。

「遠い」

「あまりなじみがない」・「キリスト教徒ではないから」・「接する機会がない」・「考え方がいまいち

¹⁷⁾ 榎内 (2004)

わからない」・「基本的に嫌い」・「信じられないようなことが多い」・「近寄りがたい感じがする」

「大きい」

「世界中に広がり大きな組織である」・「外国での信者数の多さ」・「宗教の中でもかなり有名」・「世界宗教の一つ」・「誰もが知っている」・「雄大というイメージがある」・「全宇宙の創造主である」・「天地創造の神」・「全能」

「深い」

「聖書など奥が深い」・「日本人の宗教観より深い」・「創造というスケール」・「歴史がある」・「根底に愛があり愛するということは奥深い」・「十字架の愛ほど深いものはない」・「ややこしそうだと思う」

日本人がキリスト教を「大きい」として感じる要因は、何か一つの要素に限るものではないだろう。教義に関する印象、儀礼や信者に対する印象、教育界における存在感、ライフスタイルやファッション等の風俗習慣に関する影響力などというキリスト教が日本人にもたらした諸事象が生み出したものであろう。すなわち、ある一つの限定された分野ではなく、さまざまな要素が互いに影響を与えつつ形成された多面的、多元的な「文化」が日本人にもたらした印象が「大きい」という日本人の美意識にそぐわない印象を生み出したのである。そして、その「大きさ」が弱小な存在に「美」を感じる日本人に敬遠されていると考えられる。

「日本人の美意識」の章で紹介した美術史研究家の高階秀爾は同章で紹介した大野晋の「美」を表す言葉の分析を用いて次のように述べている。

言葉の分析から得られるこのような特色は、第一に、「うつくしい」がもともと愛情表現を意味する言葉であったことから明らかなように、きわめて情緒的、心情的であるということであり、第二に「くはし」「きよし」に見られるように、日本人は、「大きなもの」「力強いもの」「豊かなもの」よりも、むしろ「小さなもの」「愛らしいもの」「清浄なもの」にいつそう強く「美」を感じていたということである。このことは、西欧の美意識の根となったギリシャにおいて、「美」が「力強いもの」や「豊かなもの」と結びついていたのと、対照的であると言ってよいだろう。

事実、ギリシャ人たちにとっては、美は、真

や善と同じように理想化された価値であり、人間よりも上位の存在である神に属するものであった。したがってそれは、当然他の理想化された価値である善や力や智慧と容易に結びつけられる。ギリシャ神話の世界における「美のコンテスト」とも言うべきパリスの審判の物語において、「美」を競うヘラ（ジュノー）やアテネ（ミネルヴァ）が、パリスに富や力や智慧を約束する話は、このことを暗示しているであろう。そして、実際の芸術作品を見ても、たとえばギリシャの彫刻のうち、男性をモチーフとしたもののほとんどが、神々か英雄でなければオリンピック競技の優勝者のようなスポーツ選手の像であったということは、ギリシャ人たちにおいては、「美」への憧れがそのまま「力」への憧れと自然に重ね合わされていたことを物語っている。端的に言って、ギリシャの彫刻の美しさは、何よりも力強さに対する讃美によって支えられていたのである。¹⁸⁾

高階は西欧人の美意識の「根」となっている『『美』が『力強いもの』や『豊かなもの』と結びついていた』ことと対照的なものであるとして日本人の美意識を捉えている。その美意識とは、弱小な対象（存在）と結びつくものである。また、高階はさらに日本人の美意識として「否定の美学」なる美意識を指摘した。同書で高階は「否定の美学」について以下のように述べている。

「小さなもの」「縮小されたもの」と並んで、「清らかなもの」「清浄なもの」に美を見出す日本人の感受性も、また数多くの美術作品のなかにもその反映を見出すことができる。伊勢神宮に見られるような、何の飾りもない白木造りの建物や、何も描かれていない画面の余白を重要視する美学は、まさしくそのようなものであろう。もともと「きよら」というのは、汚れやくもりのない状態のことである。つまりそれは、何か良いもの、豊かなものがあるという積極的な状態ではなく、余計なもの、うとましいものがないという消極的な状態である。それは、いわば「否定の美学」と言ってもよい。多彩な色彩を拒否して墨一色にすべてを賭けた水墨画や、派手な装置や動きを極度に抑制した能の舞台に、逆に豊かな、奥深い美を見出す感受性は、まさしく

¹⁸⁾ 高階秀爾『日本美術を見る眼 東と西の出会い』岩波書店 1991年 4頁

「きよらか」なものを美しいと見た上代人の感性を受け継いでいる。¹⁹⁾

「何か良いもの、豊かなものがあるという積極的状態ではなく、余計なもの、うとましいものがないという消極的状态」が日本人の美学であり、それを「否定の美学」と呼んだ。「小さなもの」どころか、「(余計なもの、うとましいもの)がない」という、「足し算」ではなく、「引き算」ともいえる否定的で消極的な美的感覚を日本人の美意識として指摘している。

日本人にとってキリスト教は、「遠く」、「大きく」、「深い」ものであるという印象が強い。それは、多元的要素に起因するものであるとはいえ、キリスト教が「世界宗教」という「世界」的なものであるという事実（もしくは印象）に拠るところが大きいだろう。実際、論者実施のアンケート調査での自由回答においても同様の記述が見受けられた。

日本人の多くにとって、キリスト教は「遠く」、「深い」存在で、手が届かない存在である。「ない」というものにでさえ「美」を感じ、「小さな」ものを「美」の対象と捉える日本人に対し「大きく」、「豊か」で「力強い」存在であるキリスト教は、その美的感覚において敬遠され、ときに拒否される存在である。すなわち、日本人の美意識という情趣においてキリスト教は馴染まない存在なのである。

おわりに

日本人にとってのキリスト教に関する今回の考察は、日本人の宗教観と美意識を手がかりに試みだが、その二つに共通する性質は、「消極的」というものではないか。日本人は宗教に対して積極的に向かい合っているとはいえない。また、その美意識は高階が「否定の美学」と称するほど消極的な性質のものである。裏を返せば、今回、対象とした西欧の宗教観および美意識は積極的なものであるといえる。そして、積極的宗教観と美意識（積極的美意識に基づく積極的宗教観といったほうが適切かもしれない）に選ばれる宗教がキリスト教であるのだ。

日本人にとって、キリスト教はほとんどの日本人にとって信仰の「深層」まで届いてはいない。それは、行事や教育という文化の表層で受け容れられているにすぎない。その理由を考えると、日本人の気質ともいえる情趣の働きについて考えるべきである。

今回は美意識を採り上げたが、この美意識こそ、日本人における他の情趣、たとえば善悪や悲喜などの「根」になる感覚であるのではないか。日本以外の文化が「真」や「善」を第一に求めるのに対し、日本文化は「美」を第一の価値とする土壌である。そして、日本、西欧を問わずすべての文化は、その「自然」、「風土」による影響を避けられず、「真」であろうと「善」であろうと「美」であろうと、それらを第一と考える価値観は各文化を生み出す背景となる「自然」や「風土」抜きには語れない。

機会があれば、「自然」、「風土」を手がかりとしての日本人のキリスト教受容に関しての考察を提示したい。

参考文献

宮家準『生活の中の宗教』（1980年 日本放送出版協会）

宮崎賢太郎『カクレキリシタンの信仰世界』（1984年 東京大学出版会）

佐久間勤『ネイティブ・インカルチュレーションの時代』（2004年 サンパウロ）

隅谷美喜男『日本の信徒の「神学」』（2004年 日本キリスト教団出版局）

大野晋『日本語の年輪』（2000年 新潮文庫）

高階秀爾『日本美術を見る眼 東と西の出会い』（1991年 岩波書店）

ISSP 国際比較調査（宗教）2008

<http://www.gesis.org/en/services/data/survey-data/issp/>

¹⁹⁾ 高階秀爾『日本美術を見る眼 東と西の出会い』岩波書店 1991年 13頁

The Function of Sentiment to Accept Christianity

The Approach through Japanese Aesthetic Awareness

Hisayoshi KASHIUCHI

Aichi Mizuho College Mizuho Senior High School

I would like to examine the acceptance of Christianity in Japan by focusing on the religious perspectives of Japanese and the aesthetic awareness as well as Japanese sentiment. Therefore, I will examine what aspects of Christianity are liked and accepted and those which are not. To be more specific, Christianity as ethnic religion and the aesthetic awareness of Japanese words are the focus of this paper.

Keywords: the aesthetic awareness acceptance; Japanese words